

巻頭言

四年生諸君、卒業おめでとうございます。晴れて社会人となられる諸君達の新たな人生の門出に対し、心から声援を送ります。ここで、あらためて入学から本日までの学生生活を振り返ってみてください。最近の厳しい社会情勢の中、諸君達を物心両面から懸命に支えてこられたご両親に対し、心より感謝していただくようお願いするしだいがあります。諸君達にとって、今振り返ってみれば短かった学生生活だったかもしれませんが、畜産学科で学んだ学問、大学生活で得た友人そして数々の経験を十分に活かし、各人が与えられた場所でそれぞれの生きる意味を見いだし、思いきり頑張ってください。

新入生諸君、入学おめでとうございます。農大は百余年の歴史を基礎に新たな時代を迎えて

畜産学科長
畜友会々長

天野

卓

います。平成十年四月、農学部だけであった学部を五学部と致しました。畜産学科はこれに伴い、新農学部として厚木新キャンパスにおいて新たな出発を致しました。そして今年からは、一年生から四年生そして大学院生までの全ての学生がこのキャンパスに集いました。農学部は農大の中で最も伝統のある学部、言い換えれば五学部の中では本家ともいべき学部です。諸君達はその農学部の畜産学科に入学されたわけです。初心忘るること無く、有意義な学生生活をスタートさせて下さい。

最後になりましたが、畜友会委員長を始めとする役員諸君、そして上級生諸君、平成十一年度の東京農業大学農友会第一〇八回収穫祭の活躍は歴史に残る素晴らしい物でした。今年は厚木キャンパスでも文化芸術展と模擬店が、世田谷キャンパスで体育祭が開催される予定です。今年もあの勢いを持って是非楽しい収穫祭を実施して下さい。そして厚木キャンパスの会員にも畜友会の四〇年の伝統をしっかりと引き継いでくれることを強く念じております。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長 佐々木 大

菜の花の香り標い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第三十六号を発刊することになりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載すると共に、昨年一年間の事業報告等を記載しています。今年は、農学部が厚木キャンパスに完全に移転することで、前刊とは違う「希望、努力、不安」など、一人一人が感じた文章が載せられています。皆さんが最初から最後まで読んで頂けたら幸いです。

ふじみの
目次

巻頭語	天野 卓
ふじみの発刊にあたり	3年 佐々木 大
同窓会だより	
同窓会長あいさつ	伊藤 澄磨
畜産振興会	
東京農業大学畜産振興会の紹介	渡邊 誠喜
研究室だより	
家畜繁殖学研究室	
家畜飼養学研究室	
家畜学研究室	
畜産物利用学研究室	
家畜育種学研究室	
家畜生理学研究室	
畜産衛生学研究室	
野生動物学研究室	
退職にあたり	農大生活十一年 高橋 強
ふじみの寄稿原稿	大草原の遊牧技術 クローン動物 畜友会諸君 大谷 忠 河野 友宏 半澤 恵
集う学友	学校までの片道2時間 カナダでの夏休み 収穫祭の感想 おいらと応援団 一年を振り返って 黒澤 亮 相澤 妙子 黒沢 望 齋藤 常浩 新保 麗子

畜友会だより

平成十一年度畜友会事業計画	
平成十年度畜友会決算報告	
東京農業大学畜友会特別会計収支報告	
平成十一年度畜友会予算案	
東京農業大学畜友会特別会計予算案	
第二九回学内スポーツ大会結果報告	
第一〇八回収穫祭結果報告	
平成十二年度畜友会役員	
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則	
第一〇八回収穫祭各部門委員長より	
学校って？	統一本部委員長 3年 佐々木 大
傾ヨリのスヌメ	前夜祭・特別企画委員長 2年 鈴木 明子
宣伝隊を初めて経験して	宣伝隊長 2年 三谷 直子

編集後記

神輿	神輿隊長 3年 得能 樹之
体育祭	体育祭委員長 3年 池田 貴司
櫓黄金伝説到来！	櫓裝飾委員長 2年 合田 恵子
北門裝飾を終えて	北門裝飾委員長 3年 勝又 瑞穂
家畜苑について	家畜苑委員長 3年 原 琢磨
編集後記	3年 山口こずえ

同窓会だより

同窓会長あいさつ

畜産学科同窓会

会長 伊藤 澄 磨

畜産学科は、昭和二十八年に第一回の卒業生三十七名が世に出て以来、今日までに第四十七回（平成十年度）の卒業式が行われ、延べ五、九七二名の同窓生が、国の内外を問わず、畜産業界ならびに関連産業界においてそれぞれ活躍されております。

我々の畜産学科は、昭和二十四年に千葉県茂原において千葉農学部畜産学科として設置され、昭和三十六年に茂原から世田谷に移転し、丁度四十周年に当たる昭和六十三年に「東京農業大学農学部畜産学科同窓会」が発足しました。

平成十二年四月からは畜産学科と農学科の二学科から成る農学部が厚木キャンパスに全面移転し、約二、〇〇〇人規模の学生が集い、活力あふれる教育と研究が展開されることと思えます。

本会は、会員相互の親睦をはかり、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的として設立され、会員の皆様のご協力により着々とその事業を展開し、十二年目を迎える間としています。

一、畜産学科（畜友会）への援助

二、新入会員および卒業祝賀会への援助

三、会員名簿の追補発行

四、同窓会報の発行

五、総会および親睦会の開催

六、役員および常任幹事会の開催

等の諸行事を行っております。特に平成十年度より、新たに開設された厚木キャンパスに新入生を迎え、各種イベントなどへの助成を中心に行っています。

卒業生の諸氏は、本日より同窓会の会員となられる訳ではありません。どうか、ここ東京農業大学農学部畜産学科で学び成長されたことを生涯の絆として各界でご活躍されることをお祈りいたします。

また、準会員ともいふべき在学生諸君は、畜産学科を母として、友となる「同窓会」を活用し、その恩恵を受けていただき幅広い人格を形成され勉強（研究）ならびに課外活動に全力に投球して悔いのない学生生活を送って下さい。

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会の紹介

東京農業大学畜産振興会

会長 渡邊 誠 喜

畜友会誌「ふじみの」の紙上を借りて東京農業大学畜産振興会について紹介させていただきます。

本会は平成三年三月二十三日に東京農業大学農学部畜産学科および同大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・学術研究の向上に資することを目的として設置されました。本会は役員として理事・監事が選任され、理事会を組織し、必要事項が審議・決定されて運営されており、この事務局は畜産学科内に置かれています。また、役員以外に評議員による評議員会が組織され、会の運営に遺漏がないよう配慮されています。

本会の事業としては

- (1) 学生への奨学金の貸与・補助
- (2) 優秀卒業論文の表彰
- (3) その他目的を達成するために必要な事業

となっております。その他の事業を具体的に申し上げますと、学生による学会発表、学術論文の発表に対する助成、教育・研究材料としての動物（乳牛・ラマ）の購入・寄贈や課外活動補助など逐次拡大して参っております。

本会運営の資産は

(1) 東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金

(2) 賛助会員会費

(3) 一般寄付金

(4) その他の収入

となっておりますが、設立の発端は上記の畜産学科同窓会からの寄付金と（故）江渡宗徳君（平成2年12月、当時畜産学科2年次に在籍）のご遺族からのご寄付によるものです。その後何件かのご寄付が寄せられ、今日の原資となっております。現今の社会的経済不況により、向学心旺盛な学生への奨学金の貸与は重要な事業となりますが、それには資産を増加させることが命題であり、役員一同努力致しております。

卒業生には本会設立趣旨を理解され、本会育成のためご支援賜りたくお願い致しますと共に、在校生は本会の目的に叶う事柄が生じた場合は本会を活用され、充実した学生生活を送られますように祈念致します。

家畜繁殖学研究室

私達、家畜繁殖学研究室は、家畜・家禽の効率的な繁殖方法の追求を目標とし、百目鬼郁男教授をはじめ、田中克英教授、門司恭典助教授、佐藤光夫講師、小川博講師、桑山岳人講師、の御指導の下、大学院生10名、4年生26名、3年生27名で構成され、室員一人一人が自覚と誇りを持ち、互いに協力し、日々活発な活動をしてい

ます。当研究室では、繁殖生理に関する研究、人工授精ならびに受精卵移植に関する研究を行っております。具体的には、生殖(受精、妊娠、分娩等)のリズムとホルモンに関する研究、繁殖行動の内分泌支配に関する研究、精子・卵子・胚の凍結保存に関する研究、体外受精等の先端的技术の研究です。

繁殖研の日常の活動内容は、3年生は繁殖学に関する基礎的な知識や実験方法やその技術を身につけるとともに、当研究室で飼養している実験動物の飼育・管理を行います。大学院生や4年生の研究・実験の補助などをしていきます。大学院生・4年生は実験動物の飼育、管理はもちろんのこと、卒業論文に関する研究や実験を日々重ねています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会並びに大掃除、収穫祭(文化展)への参加、研修旅行、卒業論

文発表会、卒業生送別会、毎週行われるゼミ等があります。当研究室もいよいよ厚木キャンパスへ移転します。今後も、より一層の飛躍を胸に邁進して行きたいと思っています。これからも宜しくお願い致します。

平成11年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導員
會田 智子	ミニチュアブタの人工流産における卵巣・胎子の観察と血中性ステロイドホルモン濃度の推移	百目鬼 桑山
安藤 哲也	乳牛の分娩前後における栄養充足率が分娩後の繁殖機能回復に及ぼす影響	百目鬼 佐藤
井上富美子	孵卵中の初期胚へのエストロジェンの投与が孵化後の雄鶏の生殖機能に及ぼす影響	桑山 小川
梅田 良子	シバヤギの産子数と血中性ステロイドホルモンの消長	百目鬼 桑山

香川 文	雄岐阜地鶏の加齢に伴うコルチコステロンの分泌について	桑山 田中
坂口 尊保	無発情状態を維持するシバヤギの卵巣像の観察と血中性ステロイドホルモンの濃度との関係	百目鬼 桑山
佐藤 隆博	雄シバヤギの末梢及び精巣静脈血中におけるエストロジェン濃度との関係について	門司 百目鬼
白澤 正則	ミニチュアブタにおけるDES投与後の血中性ステロイドホルモンの消長	門司 百目鬼
田端 将人	乳牛におけるBCSを用いた繁殖管理システムの問題点と改善	佐藤 百目鬼
千葉耕太郎	肉牛の経営分析と改善対策―水稲と肥育牛の複合経営を事例として―	新井 百目鬼
中澤 京子	胎子期におけるDES暴露がミニチュアブタの生殖器に及ぼす影響	門司 百目鬼
中林 秀剛	肉牛における分娩前後の栄養状態が繁殖機能回復に及ぼす影響	佐藤 門司
中村 和正	肉牛の繁殖成績に関わるJMRの応用	佐藤 門司
西田 美香	メラトニンがウズラ精巣間質細胞におけるアンドロジェン産生に及ぼす影響	桑山 田中
野口 梢	ブタ成熟卵子のガラス化保存における細胞質脂肪顆粒極在の効果	門司 百目鬼
浜田 和仁	シバヤギにおける交尾刺激が精液性状と性ステロイドホルモンに及ぼす影響	門司 百目鬼
比嘉さをり	孵卵中の初期胚へのエストロジェンの投与が孵化後鶏雌生殖機能に及ぼす影響	小川 桑山
松田 宣子	ミニチュアブタにおけるGnRH及びPGF _{2α} を用いた発情の同期化	百目鬼 桑山

松野 里香

シバヤギの精液性状と精液中性ステロイドホルモン濃度との関係について

門司 百目鬼

家畜飼養学研究室

宮本文美香

膈内留置型プロジェステロン製剤処置前後のウシ血中性ステロイド濃度の推移

百目鬼 佐藤

三好 順子

シバヤギにおける多排卵誘起処置法の検討

百目鬼 桑山

村上真紀子

授乳期におけるDES投与がミニチュアブタの生殖器に及ぼす影響

門司 百目鬼

矢島まどか

ミニチュアブタの出生から性成熟過程における生殖器の組織解剖学的所見および血中性ステロイドホルモン濃度の推移

百目鬼 桑山

山中有紀子

育雛期の母鶏の卵巣機能と採餌行動との関係

桑山 田中

小関 貴裕

ニホンウズラ(パンダ羽装)の増殖計画

桑山 小川

生は若干口煩いのですが、これも我々学生のことを思っていることで、時には料理の腕前を振るったり、マイクを握り熱唱したりと普段とは違う一面が観察できます。

平成11年度卒業論文題目

氏名

論文題目

指導教員

石田 憲司

首都圏西部におけるペットショップの取扱動物について

栗原 祐森

伊藤洋一郎

畜産環境保全に関する法律制定とその歴史背景について

栗原 祐森

岩原 健二

外食企業における経営存立の条件と発展の可能性

伊藤 板垣

白井 重忠

首都圏西部(近郊)におけるペットショップの取扱動物について

栗原 祐森

白井 直哉

首都圏西部(近郊)におけるペットショップの取扱飼料について

栗原 祐森

大澤 哲

リードカナリィグラスのアルカロイドに関する研究

伊藤 栗原

大野 隆行

コーヒー抽出残渣の牛糞尿由来臭気に対する作用

伊藤 栗原

久保村 修

低温飼育環境がブロイラーの成長および体組成におよぼす影響

栗原 祐森

佐々木克也

肥育前期から出荷までの歩行運動(1日3kmが豚の肉質におよぼす影響)

伊藤 鈴木

澤田 誠吾

茶くずの牛糞尿由来臭気に対する作用

伊藤 栗原

末永 宗久

梱包(バック)サイレージの品質に関する研究ー貯蔵期間の相違が化学的成分におよぼす影響についてー

伊藤 栗原

田邊 義輝 低温飼育環境がブロイラーのエネ
ルギー代謝におよぼす影響

栗原 祐森

仲山 一也 肥育前期から出荷までの歩行運動
(1日3kmが豚の肉質におよぼす
影響)
特に成長について

伊藤 鈴木

西澤 涼子 富士畜産農場圃場における牧草の
生長、および養分収量1番草(2
年目)

伊藤 栗原

濱田 美貴 給与飼料(タブレット)の硬度の
相違が子豚の嗜好性におよぼす影
響

伊藤 池田

福井麻紀子 家兔の栄養水準の相違が精液性状
におよぼす影響

栗原 祐森

前川 健一 リードカナリィグラスのアルカロ
イドに関する研究
富士畜産農場における一番草の出
穂前および刈り取り時のアルカロ
イド含量について

伊藤 栗原

牧 恵梨子

富士畜産農場圃場における牧草の
生長および養分収量2、3番草
(2年目)

伊藤 栗原

松本 真人

首都圏西部におけるベットショッ
プの取扱飼料について

栗原 祐森

持田 隆信

梱包(パック)サイレージの品質
に関する研究
貯蔵期間の相違が品質におよぼす
影響

伊藤 栗原

山田 勝也

低温飼育環境がブロイラーの消化
率におよぼす影響

栗原 祐森

吉田 秀一

肥育前期から出荷までの歩行運動
(1日3kmが豚の肉質におよぼす
影響)
特に化学的性状について

伊藤 鈴木

若井多恵子

給与飼料(ペレット)の硬度の相
違が子豚の成長におよぼす影響

伊藤 池田

脇 洋一郎 乗用馬の養分給与量について

伊藤 祐森

黒澤 利江

ビタミンB12給与量の相違が食糞
阻止ラットの成長におよぼす影響

池田 祐森

砂本 英世

家兔の市販飼料の形態および化学
的成分について

栗原 祐森

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、萩原國威講師、西
脇充講師の3名の先生の御指導のもとに、4年次生28名、
3年次生29名、計57名の室員で日々の研究活動を行って
います。

本研究室では、国内外の実習・調査を通し、家畜生産
現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察し、
それらに係わる研究を行っておりますが、家畜・家禽・
産業動物・草地・環境保全・生産物流通など、研究内容
は畜産全般にわたっております。

現在の主な研究課題は

- ・家禽の管理技術の向上に関する研究
- ・畜産をとり入れたアグリツーリズムに関する研究
- ・モンゴルの草地と家畜生産に関する研究
- ・有機物資源の堆肥化に関する研究

その他に、年間行事として、新人生歓迎会・研修旅行・
納会・月2回の定例会などと各研究班によるゼミがあり
ます。まだまだ設立されたばかりで、他の研究室のよう
にスムーズには進まない面も多いですが、室員全員で形
を模索しつつ、日々楽しく活動しております。

平成11年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導 教員	佐々木忠宏 我が国における家畜糞尿処理方法 の実態と問題点	荻原
青木 エミ	伴侶動物の現状と将来の展望につ いて	西脇	和牛の現状と課題	荻原
青木 雄樹	動物と児童との関わり	西脇	寒冷条件における家畜糞尿の速成 堆肥調製方法と堆肥舎面積の関係 についての研究	大谷
阿部 光子	我が国の公共的ふれあい牧場の実 態と問題点	大谷	乳牛及び肉牛の管理方法の違いに よる糞尿の堆肥調製とその品質	大谷
上西 大輔	馬肉の生産及びその現状	荻原 大谷	埼玉県下におけるSPF養豚場の 経営実態調査	西脇 鈴木
大沼 純一	リードカナリーグラスの刈り取り 回数別による生育生産性に関する 研究	大谷	我が国における生ゴミ・家畜糞尿・ 圃場残渣物などの混合堆肥調製施 設の現状と問題点	大谷
久保 智加	水牛の生理、生態の特性における 汗腺に関する研究	大谷	水牛の生理、生態の特性における 皮膚組織に関する研究	大谷
小林 歩	有機資源の異種混合材料による堆 肥調製方法	大谷	ダチョウの孵化に関する基礎的研 究	西脇

氏名	論文題目	指導 教員	藤田 光治 自然養鶏飼育下における採卵鶏の 産卵成績と卵質の検討	西脇
坪井美乃里	ダチョウの孵卵中における卵重減 少率が孵化成績に及ぼす影響	西脇	静岡県東部沼津地区における酪農 の現状と問題点	荻原
寺尾 智也	水田酪農における自給飼料確保の 課題と可能性	大谷 藤本	地域環境に適合させた我が国の理 想的ふれあい牧場の構築に関する 研究	大谷
徳田佐和子	モンゴル国自然草地の季節生産性 と草地が遊牧家畜に及ぼす影響	大谷	飼鳥の飼育方法に関する検討	西脇
中島 修一	Fish phosphatidyl Choline 給与 が雛の成長に及ぼす影響	西脇	モンゴル国の Selenge-Onon 地域 並びに Hangai-Huvsgul 地域にお ける夏期から秋期にかけての草原 植生とその飼料価値に関する基礎 的研究	大谷 小野
濱田奈美子	パイプライン方式における対頭・ 対尻式の作業動線に関する研究	荻原		
平井 初芽	高齢者福祉施設における動物介在 療法の現状	西脇		
平本 洋右	神奈川東部地区の肉牛飼育方法が 肉質や価格に及ぼす影響	荻原		
藤田 健吾	鳥取県における肉牛経営の現状と 問題点の解析	荻原		

畜産物利用学研究室

平成11年度卒業論文題目

本研究室は室長の山中良忠教授をはじめ高橋強囑託教授、古川徳助教授、松岡昭善助教授、中村健人副手の指導のもとに大学院生3名、4年次生27名、3年次生23名の室員で構成されており、それぞれ活発な活動を行っています。

当研究室では乳・肉・卵に含まれる各種成分の化学的、物理的特質ならびに栄養・生理的機能特性を品種、個体、分子レベルで追求。食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発に取り組んでいる。

年間の主な活動は、週1回の食品に関するセミナー、新入生歓迎会、乳酸飲料製造実習をはじめ、ロースハム・スモークドチキン・プリンの収穫祭における販売、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

氏名	論文題目	指導員
秋吉 大樹	脂肪酸組成を指標とした家禽肉の識別	松岡
池下さおり	乳酸菌のCa ₂₊ 細胞への付着性に及ぼす糖およびペプチドの影響	古川
石坂 寛子	国内産馬肉のタンパク質構成アミノ酸組成ならびに無機成分組成について	松岡
稲垣 孝	フローズンヨーグルトの乳酸菌数維持法の研究	高橋
岡本 澄枝	乳酸菌の投与がマウス糞便中の酵素活性に及ぼす影響	古川
岡本 正樹	胃液損傷乳酸菌の胆汁酸耐性について	古川

金井 秀郎	アイラグ中の酵母の分離と同定	古川	関根 修司	東京シャモ、名古屋コーチン及び黄斑プリマスロックの発育過程における体成分の比較	松岡
釜 郁子	酒粕漬け生ハムの製造に関する研究	松岡	関根穂子	ヤギ乳中の静菌性タンパク質の分離と同定	古川
神田 和枝	味付け卵の保存性の改善	山中	田口 亮	国内産馬肉の脂質組成に関する研究	松岡
工野 大介	ヨーグルト用バクスターターの保存性に関する研究	高橋	妻沼 聡	芳香乳酸菌を利用する新型ヨーグルト製造法の研究	高橋
越田 啓子	乳酸菌培養液の投与がマウス糞便の酵素活性に及ぼす影響	古川	服部久美子	RAPD法による肉種の鑑別	松岡
古山 美穂	乳酒製造用乳酸菌と酵母の選択	古川	林 大輔	非加熱発酵ソーセージの製造に関する研究	松岡
鈴木 啓盛	経口投与した乳酸菌の糞便中における消長	古川	原崎 奈美	国内産馬肉の科学的組成に関する研究	松岡
鈴木 規史	チーズ熟成に及ぼすリゾチーム複合体添加の影響	山中	足田 奈柚	国内産馬肉の遊離アミノ酸組成ならびにATP関連物質について	松岡
鈴木 麻耶	ヒト乳癌細胞の増殖に及ぼす脂溶性成分の影響	古川			

平野 敦司 芳香生産乳酸菌のジアセチル生成能向上法に関する研究 古川

松本 哲秀 豆乳発酵性乳酸菌の分離と同定 古川

中村 正則 イタリアンサラミソーセージから分離した乳酸菌の同定とその利用に関する研究 松岡

壽 淳子 流通、特許、報文から分析した発酵肉製品の現状と将来 松岡

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、血清学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、田中一栄教授をはじめ、天野卓教授の指導の下、野村講師、古郡実験助手、大学院生8名、研究生1名、4年生17名、3年生29名によって構成され、室員各自の自覚と互いの協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては電気泳動による血液蛋白型の研究・モノクローナル抗体を用いた赤血球抗原に関する研究・在来家畜の遺伝学的研究・組織適合性抗原遺伝子のDNA解析などが行われています。

研究室での日常の活動は実験動物の管理、毎週行われるセミナー、定例室員会、卒業論文などの研究、実験における問題を解決するための討論などです。さらに研究活動は学内だけにとどまらず、先生方や院生による、学会発表や学生による他大学や他の研究機関での研究を行っています。

研究室における主な年間行事は、新室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などがあります。

平成11年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導教員

荒明 万里 ヤギ赤血球抗原の免疫遺伝学的研究 天野 野村

上野智恵子 ヤギの個体識別遺伝子マーカーに関する研究 天野 野村

小野 浩輔 大分県玖珠地方における酪農の現状と展望 田中

片平 梨絵 ウシの血液型に関する研究 天野 野村

蒲生 純 マウスを用いた漢方薬の瘦身効果に関する研究 天野 野村

川合 暁子 家畜臓器を用いた人工臓器開発に関する基礎的研究―回流式培養装置による肝不全ブタの治療系の最適化― 天野

河池 広文 血液蛋白型によるウシの系統分類に関する研究 天野 野村

川崎美紀子 ウシ卵管上皮細胞株の樹立 田中

串田 知子 ヒト上皮幹細胞に関する研究―幹細胞で発現する遺伝子群の機能― 田中

佐藤 洋一 ウシ赤血球膜抗原の免疫遺伝学的研究 天野 野村

関口 能成 遺伝的肥満マウスを用いた漢方薬の瘦身効果に関する研究 天野 野村

高橋奈々恵 家畜臓器を用いたヒト人工臓器開発に関する基礎的研究―培養肝臓細胞の分化機能維持因子の探索― 天野

高橋由紀子 スイギュウのMHClass II遺伝子に関する研究 天野 野村

茅根 明美 ヤギの毛色支配遺伝子に関する基礎的研究 天野 野村

成田 純子 ウシ体細胞の核移植に伴う遺伝子発現の変動 田中 岩崎

家畜生理学研究室

南山 麻美 ミトコンドリアDNA遺伝子情報に基づくウシの系統分類に関する研究―特にチトクロームb領域による解析― 天野 野村

盛本 拓 ヤギの微量サンプルを用いたDNA増幅に関する研究 天野 野村

古越 和孝 血液蛋白型によるウシの系統分類に関する研究―特にHb型情報に基づく解析― 天野 野村

立脇 直子 ミトコンドリアDNA遺伝子情報に基づくウシの系統分類に関する研究―特にDループ領域による解析― 天野 野村

家畜生理学研究室は、渡邊誠喜教授をはじめ、半澤恵助教授、吉田豊講師、原ひろみ副手の御指導のもと、大学院生8名(うち2名がタイからの留学生)、学部4年次生24名、3年次生23名で構成されています。本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理的機構の遺伝的支配に関する研究が行われており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究、③ウシに関する研究、④ヤギ・ラマ等その他の動物に関する研究、に大きく分けられます。

①においては、運動生理上の赤血球の変化、造血幹細胞の培養と培養赤血球の成熟過程、生体内機能に関する免疫学的・血清学的解析、馬腫瘍由来細胞の株化に関する研究、免疫器官における免疫担当細胞の動態に関する研究などが行われています。②においては、各種動物の組織適合性複合体(MHC)に関する分子遺伝学的・免疫学的解析、血液型の解析、ゲノムDNA解析などが行われています。③においては、ウシの肉質改善のためのビタミンAに関連する諸々な現象に関する内分泌学的な研究が行われています。④においては、高温環境がシバヤギならびにニホンウズラに及ぼす影響に関する研究、ラマの血液成分の解析、各種鳥類のDNAによる性別

などが精力的に行われています。研究室における日頃の活動は、3年次には生理学に関する基礎的な知識や実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習が課せられていると共に、学生は実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には、前述した研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との協議により決定し、卒業論文研究を行っております。留学生を含む院生は自分の学位論文のテーマに則り、日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。年間の主な行事として、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。なお、平成11年度の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成11年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
安倍 秀一	ニワトリの加齢に伴う胸腺内T細胞の変化	渡邊 吉田
片山 絃子	ニホンウズラ真核DNAにおける種特異的反復配列の解析	渡邊 半澤

加藤奈帆子 鳥類のSemi-nested PCR法における性特異的DNA断片の塩基配列の解析 渡邊 半澤

加藤 洋一 ラマ属家畜の血液蛋白および酵素の分子型について 渡邊 吉田

高達美沙子 拘束ストレスがニホンウズラの脳内CRHとセロトニンの分泌量に与える影響について 渡邊 吉田

小森 美和 ニホンウズラのMHCClass IC遺伝子座の遺伝的多型の解析 渡邊 半澤

後藤 亜矢 ニホンウズラの母子間における移行抗体について 渡邊 吉田

櫻井 邦江 *In vitro*により成熟培養したウマ末梢血由来赤血球系幹細胞における2、3抗原の解析 渡邊 半澤

柴田 章子 浸透圧がMurphy法を用いて分離した馬赤血球の密度に与える影響 渡邊 半澤

菅原 大輔	ウマアルギナーゼ遺伝子のDNA解析	渡邊 半澤
中島 栄輝	浸透圧 $\Delta\Pi$ 法を用いて分離した馬赤血球の容積に与える影響	渡邊 半澤
細道 一善	ニホンウズラのMHClasss ID遺伝子座における遺伝的多型解析	渡邊 半澤
堀尾あやこ	PCR法を用いた鳥類の性別並びに性特異的DNA断片の塩基配列の解析—特にUSPプライマーによる—	渡邊 半澤
増田 寛之	ダチョウ肉の消費動向の状況と将来性に関する考察	渡邊
松浦 剛	ウマ培養細胞における酵素多型に関する研究	渡邊 半澤
宮田 寛	ウマ培養細胞の遺伝子変異に関する研究—特にP16遺伝子について—	渡邊 半澤

向井 朋美	ウマ培養細胞の電子顕微鏡による解像	渡邊 半澤
森 有貴	ニホンウズラの拘束ストレスによる脳内セロトニン並びに血漿中アミノ酸量の変動について	渡邊 吉田
山下 裕美	ニホンウズラ真核DNAのHind消化産物に含まれる800bpバンドのシーケンス	渡邊 半澤
山谷 晶代	ウマ培養細胞へのSV40導入による株化に関する研究	渡邊 半澤
山田 恭子	DNA多型およびタンパク質多型によるバンドウイルカの親子鑑定	渡邊 半澤
佐藤加志吾	ウシ血清中トランスセイレチンの単離精製と抗体産生に関する研究	渡邊 吉田

家畜衛生学研究室

我がが、家畜衛生学研究室は、室長の近江助教授をはじめ、渡邊助教授、鹿江囑託教授、東量三客員教授の御指導のもと、大学院生二名、四年生二十五名、三年生二十六名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、牛班、豚班、実験動物班、鶏班に分かれ各家畜、家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家禽・家禽の生命を脅かす種々の健康阻外因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が、元来の家畜衛生でありましたが、最近では「動物の福祉」という観点からの家畜衛生、および伴侶動物(ペット)の衛生管理法など家畜、家禽以外の各種動物も対象となってきています。

また、併設されている家畜診療所においても一般外来動物の診療を中心に各種の研究活動が行われています。

その他の研究室活動は、年間行事として新入室員歓迎会、収穫祭では模擬店で「しし汁」を出店し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会などがあり、室員の団結を深め、各々が、目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行っています。

平成11年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
秋田 郁絵	<i>Haemophilus paragallinarum</i> に対するホロホロ鳥の感受性に関する研究	渡邊
井上 綾子	トルマリン素材物質の育成期プロイラーに対する影響	渡邊 西脇
大浦真紀子	PCR法を用いた鶏ニューカッスル病ウイルス株の識別	渡邊
大木美登理	豚回虫の人口感染に関する研究—一般臨床所見の観察について—	近江 鈴木
鳳 麻衣子	豚回虫の人口感染に関する研究—臨床病理について	近江 鈴木
岡部 新	乗馬施設における内部寄生虫虫卵の汚染状況	近江 渡邊

片桐 丈弘	犬ポルパウイルス感染症の診断に 関する研究—簡易検査法の応用—	近江 渡邊	鈴木 浩士	消化管内寄生虫卵の培養に関する 研究	近江 渡邊
勝村 寛子	動物園飼育下動物の内部寄生虫に 関する研究—虫卵検出法について—	近江 渡邊	瀬沼麻悠子	ミニチュア豚の伴侶動物としての 学習能力について	近江 鈴木
金井 純一	<i>Tonsillophilus suis</i> の 16S rR NA塩基配列	渡邊	中村 健太	自然環境下における犬消化管内寄 生虫卵の発育観察	近江 渡邊
川俣 陽子	牛核移植胚における初期化に関す る遺伝子発現の解析	岩崎 近江	廣上 丈史	本学世田谷キャンパス内飼育ヤギ における内部寄生虫卵保有状況	近江 萩原
菊地 瑠美	スフィンクス猫由来材料の微生物 学的検査	渡邊 鹿江	藤田 紀代	動物由来 <i>Propionibacterium</i> 属菌 の 16S rRNA塩基配列	渡邊
北風 孝広	<i>Fusobacterium necrophorum</i> のプ ロテアーゼ活性について	渡邊 鹿江	松岡亜沙野	患畜由来病的材料の臨床細菌学的 検査	渡邊 鹿江
桑田 圭子	犬飼育施設内排泄犬糞の内部寄生 虫卵保有状況	近江 渡邊	山崎由紀子	ダチョウの育成期における排泄糞 便中最菌相の検討	渡邊 西脇
佐久間公太郎	シバヤギに寄生を認めたヤギハギ ラミの駆除法について	近江 萩原	行正ともこ	消化管内寄生虫卵保有犬における 臨床的観察	近江 渡邊

吉田光一郎	鶏コクシジウム症に対するFPC (Fish phosphatidyl choline) の 効果	西脇 渡邊	<p style="text-align: center;">野性動物学研究室</p> <p>本研究室は吉行教授、河野教授の御指導のもと、室員 がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。 地球上に存在する生物は地球環境の変化によって生存 が左右され人類を含む生物に対してこの変化は脅威となっ ている。そこで本研究室は動物の種の保存、人と野生動 物の共存を目指し日々研究を行っている。 これらの研究を行うにあたって私達は2つの方向から 追究を行っている。一方では野生動物の分類や行動、生 態の研究といった動物学的追究であり、フィールド調査 (サンプル捕獲や行動観察など)と飼育下における研究 が主となっている。もう一方では、生殖細胞の操作や遺 伝子発現の解析などといった発生学的見地から研究して いる。</p> <p>野生動物としてネズミやコウモリなどの小型哺乳類、 ムササビなどの中型哺乳類、サルなどの大型哺乳類を、 実験動物としてマウスなどを、伴侶動物としてイヌやネ コなどを、動物園の動物としてゾウなどを研究の対象と して扱うことにより総合的な面から本研究室の目的を追 求している。</p>	
頼貫 健吾	路上排泄犬糞の内部寄生虫卵保有 状況	近江 渡邊		
神永 結花	世田谷キャンパス内飼育鶏に寄生 を認めた外部寄生虫の駆除法につ いて	西脇 渡邊		

野性動物学研究室

本研究室は吉行教授、河野教授の御指導のもと、室員
がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。
地球上に存在する生物は地球環境の変化によって生存
が左右され人類を含む生物に対してこの変化は脅威となっ
ている。そこで本研究室は動物の種の保存、人と野生動
物の共存を目指し日々研究を行っている。
これらの研究を行うにあたって私達は2つの方向から
追究を行っている。一方では野生動物の分類や行動、生
態の研究といった動物学的追究であり、フィールド調査
(サンプル捕獲や行動観察など)と飼育下における研究
が主となっている。もう一方では、生殖細胞の操作や遺
伝子発現の解析などといった発生学的見地から研究して
いる。

野生動物としてネズミやコウモリなどの小型哺乳類、
ムササビなどの中型哺乳類、サルなどの大型哺乳類を、
実験動物としてマウスなどを、伴侶動物としてイヌやネ
コなどを、動物園の動物としてゾウなどを研究の対象と
して扱うことにより総合的な面から本研究室の目的を追
求している。

平成11年度卒業論文題目

氏名 論文題目

指導
教員

相原 啓之 牛成長期卵母細胞の成熟能に関する研究

川村 輝 伊豆大島のキクガシラコウモリの生態―二子山防空壕における個体群の動態について―

赤木麻衣子 日本産食虫性コウモリ4種飼育下における生理および行動について―

北田 貴士 飼育下におけるカヤネズミの行動について

伊藤 利恵 アブラコウモリの飼育下における生理について

佐藤 和恵 上野動物園におけるトラの形態的特徴及び行動について―

井西 洋祐 放し飼いで下におけるリス類3種の生態

塩田 瞳 飼育下におけるアブラコウモリの生理についての研究

内田健太郎 神奈川県南部におけるタイワンリスの生態及び被害について

清水 伴巳 富士畜産農場およびその周辺地域に生息するモグラの研究―その飼育下における行動解析

岡野 利恵 飼育下におけるアジアゾウの皮膚温について

高田 直子 ムササビなどの野生動物を扱った環境教育について

小篠由里子 クビワオオコウモリおよびマダガスカルオオコウモリの食性解析

高橋 伸和 ネコの社会行動について―ネコとヒトとの関係―

中谷 航 帰化動物ブラックバスの食性について

土屋 祐 放し飼いで下におけるリス類3種の生態

増田 麻子 クビワオオコウモリおよびマダガスカルオオコウモリの食性解析

横山 修二 富士畜産農場およびその周辺地域に棲息する地上棲の小哺乳類各種の環境選好性について

松永 諭 厚木市内のゴルフ場におけるモグラ類の被害状況について

義澤 祥生 厚木市内のゴルフ場におけるモグラ類の被害状況について

三栗野真平 飼育下におけるカヤネズミの行動について―

渡邊 達明 富士畜産農場及び周辺地域におけるネズミ類の種類とその生息環境について

宮崎 敦 朝霧高原および浅間高原におけるハタネズミの生態および行動

三海 泰良 開放型微小ストロー(OPS法)によるマウス系統別胚のガラス化保存

村上 順一 帰化動物ブラックバスの食性について

浅利 裕伸 ムササビなどの野生動物を扱った環境教育について

矢崎 潤 イヌのカーミング・シグナルについての研究―その識別と活用―

脇坂 元気 富士畜産農場及び周辺地域におけるネズミ類の種類とその生息環境について

山崎 佳子 奥多摩におけるムササビの出巢・帰巢について

吉行 吉行

退職にあたり

農大生活十一年

畜産物利用学研究室

教授 高橋

強

私は平成十二年三月をもって定年により東京農業大学を去る。かえりみると平成元年四月から嘱託教授として十一年、翌平成二年四月から大学院畜産学専攻指導教授として十年勤務したことになる。この間平成三年には、農大百年記念式典、平成十年には学部再編による畜産学科の厚木キャンパスでの授業開始、等の記憶に残る大きな出来事があったが、この十一年間、教師として未熟の私をあたたく迎えてくださった教職員の皆様、ならびに農大のよき伝統を受けついで学生諸君のおかげで十一年間の農大生活を大変気持ちよく過ごさせていただいたことを深く感謝している。

今回ふじみの編集部の依頼もあり農大生活をふり返り拙文を草することとした。

講義について

平成元年四月からの嘱託教授としての畜産学科学生に対する私の講義は動物基礎化学（旧カリキュラムでは畜産化学）と畜産物利用学である。

現在の動物基礎化学は一年生の前期必修科目で、講義内容は『畜産学の履修に必要な基礎生物化学』ということである。生物化学の履修には有機化学の初歩知識が必要なので講義が始まる四月の一日二時間は有機化学の基礎について解説することになっている。

ところが講義開始段階で一部の学生から『高校時代に化学の単位を取得してこなかった』あるいは『大学入試は生物学で受験したので高校時代に化学を勉強してこなかった』等の理由から講義内容が理解し難い、とする声

が毎年聞かされる。高校教育のあり方に関することであるが、物理、化学、生物、等の専門学科の履修に必要な基礎学は、かつての教養課程のように大学入学後に再教育すべきではないかと思うのだがどんなものだろうか。

しかし講義の進行につれて講義内容が理解できないという声はあまり聞かれなくなるし、期末試験の結果から判断すると授業内容は大部分の学生が概ね理解していると思われるので、高校時代の化学の単位取得の有無はそれ程心配することではないのかもしれない。

畜産学科学生に対する私の講義について一部の学生から板書が多すぎる、講義の速度が速すぎる、といった苦

情が寄せられる。しかしこのような苦情が寄せられることは十分承知の上の講義である。

授業中の私語が多いのはどの大学でも同じであろうが、私語をやめさせ学生の注意力を講義に集中させるには、板書をやや多めとし、授業の進行速度をやや早目とすることが有効な手段の一つだと私は考えている。板書を早目に消したりするとキヤーといった悲鳴があがったりするが、板書をやや多くし、授業の進行速度をやや早くすることで私語が減り講義内容が理解されやすくなる

と考えて実施してきた私なりの授業方式である。

この十一年間、私は大学院畜産学専攻博士前期課程院生に対する講義も担当してきたが、十一年前農大大学院の講義も担当することになった旨、恩師の故津郷友吉先生（東京大学名誉教授、元東京家政大学学長）に御報告申し上げたところ、大学院で教えるにはたえず勉強して新智識の吸収に努めることが必要だ、とのアドバイスをお願いした。このアドバイスをどれだけ実践できたか心もとないが私なりの努力はしてきたつもりである。

大学院講義で感じたことは欠席者が比較的に多いことである。大学院博士前期課程は二年間で修士論文を仕上げねばならないので実験が忙しく講義に出席できない場合があるのだろうと理解しているが、日本人よりも留学生の方が出席率が高いように感じられた。とくに私の講義に必ず出席して熱心にノートをとっていた数人の留

学生の姿は強く私の印象に残っている。

十一年間の農大通勤

私は埼玉県狭山市に住んでいるが世田谷キャンパスまで西武新宿線と小田急線を利用して十一年間通勤した。通勤所要時間は朝と夕とで若干異なるが約一時間五十分である。十一年の通勤途上では思いがけないアクシデントに遭遇したが忘れられないのは次の二件である。

平成十年一月七日午後から畜産学専攻委員会が開催されたが、博士論文発表と論文審査にかなりの時間を費したのが午後六時半すぎだったと思う。この日は午後から大雪となり夕方には都内で三センチ近い積雪となった。

会議終了後、降りしきる雪の中を経堂駅まで徒歩で到着しホームに停車中の新宿行き電車の座席に腰をおろしヤレヤレと思ったところが、この電車は積雪のため発車できず経堂駅に長時間停車することになった。動き出したのは十一時頃だったと思うが、発車したものの新宿までノロノロ運転で新宿到着時は真夜中の十二時をすぎた。経堂から新宿まで五時間半もかかったことになる。

西武新宿線は終電車がすでに発車したあとであり、新宿駅周辺のホテルは満室であった。タクシーもつかまらないのでやむを得ず小田急駅員の案内で停車中のロマンスカー内で一泊することになった。

交通機関の乱れから列車ホテルで宿泊する通勤客の姿

は、テレビ、新聞等で時折報道されるが、まさか平成十年の年明け早々に私が列車ホテルで宿泊することになるうとは思ひも及ばないことであった。

毎年三月二十日は農大の卒業式である。平成七年三月二十日も例年のように卒業式当日の諸行事に参加するため家を出たが、九時少し前、西武新宿駅から小田急新宿駅に向って歩行中異常な出来事に遭遇した。すなわち青梅街道を四谷方面に向ってサイレンを鳴らしながら猛スピードで走り去るパトカー群と救急車である。何かの事件が発生したのかと大して気にもとめなかったが小田急線の車内アナウンスにより地下鉄は千代田線を始めとしていくつかの線が運転を中止していることを知った。農大に到着しテレビ報道で地下鉄サリン事件の発生を知り、新宿青梅街道でパトカー群と救急車が猛スピードで走り抜けて行った理由が納得できた。

東京の中心部でこのような恐ろしい事件が発生するのは全く信じられない思いだった。

学部改組により平成十年四月に厚木キャンパスが開校され、平成十二年四月には新農学部の厚木移転がすべて完了するわけであるが、厚木市内を見おろす丘陵地に建つ新農学部は、世田谷キャンパスのよき伝統を引き継ぎ独自の特色をもつ素晴らしい新農学部に成長して行くことを願って擲筆する。

ふじみの寄稿原稿

大草原の遊牧技術

家畜学研究室

教授 大谷 忠

社会主義体制の「モンゴル人民共和国」が自由主義体制に転換し、モンゴル国に改まったのは、僅か8年前の一九九二年である。経済的物資の最大の援助国だった旧ソビエト連邦の崩壊は、モンゴル経済はもとより、農業の混乱を招き食糧事情を著しく悪化させている。特に大面積で営農されていた小麦の生産は、大型機械のパイプや燃料不足で栽培を放棄せざるをえない地域が多くなり、見るも無惨な荒廃地が散在している。しかし、モンゴルの大草原は、三〇〇〇年の歴史を有する遊牧技術で管理されてきただけに、草をはむ家畜の群と大自然が融合し、壮大なる美観を呈した大パノラマは観光客の目を魅了しており、畜産の世界だけは好調に見えるのである。モンゴルの草原は家畜飼養のために、数千年前とほとんど変わらない遊牧方法で利用されてきたが、草原を荒

廃させずにこれまで続けてきた遊牧技術は、遊牧民の代々の伝承によるものであると言われる。しかし、この遊牧技術とはどの様なものと遊牧民に聞き取り調査を行ったが、明確な解答を得ることが出来なかった。幾つかのモンゴルの遊牧に関する書籍にも詳しいことは述べられていない。遊牧とは人と家畜が草を求めて転々と住居を変えて歩き回り、また、採食された草が再生伸長した地に戻り、家畜の生産を上げることであるが、この移動日をどのようにして決めているのかはつきりしないのである。これについて、一般的に考えられることは、採食されて草量が少なくなり、低嗜好性の不食草（多繊維、有刺、弱毒）のみになった草地、家畜の採食あるいは繁殖行動、草の再生に係わる土壌の良否、気象状況などを即座に判断する能力を有しているからであろうが、彼らの話では、これら以外に目が良くなければ数百頭の家畜とともに立派な遊牧を実施することはできないと言う。筆者もこの目の良さについては大変驚き、感激し、そして十分納得したことがある。草原に放牧されている家畜の群には、移動の時以外、牧夫はほとんど近くにいない。しかしこの群が畜主の意図しない場所（他人の放牧エリアや小麦あるいは野菜などの耕作地）に移動しようとする気配が少しでも生じた場合は、馬に乗った牧夫が風のように現れ、群の動きを修正するのである。遠くどこかで監視していたのであろうが、目が良くなければできない技である。筆者が羊の大群を撮ろうと車から降り、

カメラを操作していた数分の中に、突然ファインダーの中にアラジンのランプの精のような大男が写り、驚いたことがあった。「自分の羊に何の用か」と迅速力で近づいてきたのである。家畜を上手に管理する能力はこれなのかと感心するのみだった。

前から遊牧民は視力がずば抜けてよく、暗闇も平気で草原を歩くと聞いていたので、昨年の草原調査の間に、視力検査でよく使うC記号のランドルト氏環表を用いて、遊牧民二十人の視力検査を行ってみた。この結果は、3mの位置からでは約半数が一・五以上で、ほとんどの人が一・〇以上であった。また、3mの位置で二・〇の視力があつた人をさらに2m離れた5mの位置から検査してみると、驚くことに一・五の値を認識したものが7人もいた。これで単純計算するとこの人達の視力は四・〇近くになるのかもしれない。モンゴル人の目の話はこの検査結果で納得したのである。

さて、話を戻すことにしよう。モンゴル人の遊牧技術は、代々の伝承で得る能力もさることながら、動物的本能のような機敏性、すなわち鋭い野性的五感が備わっている必要がある。と云うことが分かって、これをうまく説明できる者はまずいないだろう。従って、このようなことを詳しく調査し、整理することができれば、草地生産や家畜生産分野における興味ある研究論文になると思う。ただ、今冬百万頭以上の家畜が寒波で死亡したと言いが、きびしい自然との係わりも念頭に置く必要がある。

観に大きな変革をもたらそうとしている。ここでは、クローン研究の流れをまとめて紹介し、この技術に何が期待されているのかを考えてみたい。

核移植技術の誕生と発展

生物が種として存続できるかは、ひとえに如何に次世代を残していくかにかかっている。そのために、生命が地球上に誕生して以来、生物は多種多様な生殖戦略を生み出してきた。哺乳動物は、根本的に他の動物と異なる繁殖戦略を進化させ、胚は母親の養護に依存しながら母胎内で全ての発生期間を過ごす。さらに、哺乳類では雌雄ゲノム(精子・卵子)の機能が決定的に異なることから、個体発生にとって雌雄ゲノムの存在が不可欠であることも際立った特徴といえる。当然のことながら、哺乳動物における生殖・発生に対して私たちが人為的に関与できる余地は極めて限られていることになる。しかし、一九八〇年代に入ると、生殖細胞の操作技術が急速に進歩し、聖域であった生殖細胞操作の領域も一変することとなる。核移植はその代表的な技術として取り上げられる。細胞核を卵子の細胞質へ導入する技術である核移植は、一九五〇年代始めに両生類において開発された。哺乳動物における核移植技術が開発されるまでには年月を要したが、一九八三年、MacGrah & Solterにより再現性の高い核移植技術がマウスで開発された。その特徴は、(1)顕微鏡下でのマイクロマニピュレーターの使用

クローン動物

野生動物学研究室
教授 河野友宏

はじめに

人は、人生を自然界の要素に置き換えてみる事があえる。鎌倉時代に鴨長明は、方丈記のなかで人の生を「絶え間ない川の流れて現れては消える泡」にたとえ、美空ひばりは「川の流れるように」を歌いながら逝った。私は、美空ひばりのファンではなかったが、いい歌である。カラオケで気持ちよさそうに「川の流れるように」を熱唱する友人を思い出す。人生は繰り返すことのできないドラマということなのだろう。生物学的に見れば、確かに受精の瞬間に始まった生命の活動は、決して時間軸を遡ることなく進行し、個体発生を遂げ、成熟し、そして老化してやがて死を迎える。ところが、最近のクローン技術の開発は、死で行くはずの体細胞から新たな生命を誕生させることを可能としてみた。もちろん、クローン技術を使えば人生を繰り返すという訳ではないが、生物学的には発生・分化の時間軸を巻き戻したことは紛れもない事実である。クローンの誕生は、私たちの生命

(2)細胞骨格阻害剤のサイトカラシンBを含んだ操作液中で核の除去及び採取、(3)細胞融合能を持つパラインフルエンザウイルスの仲間であるセンダイウイルスを用いた細胞融合法の活用、が挙げられる。この技術が確立されたことにより、クローンの時代の幕が開かれたのである。

そもそも発生は時間の経過に伴う不可逆的な生命現象のはずであった。古代から、若返りの媚薬にまつわる話は枚挙に遑がないが、生物が若返ることができないのは確然とした事実である。ところが、排卵された未受精卵の細胞質は、個体発生過程で後天的修飾を受けた核(ゲノム)を再プログラムする能力を持っていた。発生分化の進んだ細胞核を染色体を除去した未受精卵細胞質へ核移植すると、未受精卵細胞質のリプログラム能によりドナー核に全能性を誘起できたのである。一九八六年にWilladsenは、ヒッジにおいて8-16細胞期の初期胚の一つの割球を染色体を除去した未受精卵に電気刺激を用いて融合することで、産子の作出に成功し、クローン作出への第一歩が踏み出された。その後、他の哺乳動物種へも急速に応用され、ウシ、ウサギ、マウス、ブタ、サルなどから初期胚核に由来するクローン個体が続々と生産されたのである。

その後の研究の焦点は、さらにより多くのクローンを得る方向に展開する。そのために、より発生段階の進んだ胚、未分化な生殖系列上の細胞あるいは培養細胞をドナー核としてクローンの生産が試された。しかしながら、

当初体細胞クローン産子の生産には至らなかった。私は、その理由がおそらく研究者自身の心構えにあったと考えられている。皆ができないものとはじめから諦めていた節があった。ところが、一九九六年、Campbell博士らは、血清飢餓培養によりG0期に同調された初期胚由来の培養細胞を用いる核移植システムを応用することで、ヒツジにおいて体細胞核移植胚由来の産子が得られたことを初めて報告した。彼はもともと酵母の細胞周期を研究していた、哺乳動物の生殖に関しては素人に近い。そんな研究者により、いよいよ体細胞クローン時代の幕が開けられたのだ。フレキシブルな感性こそ、研究者にとって最も大切な要素といえるだろう。その後、ウシおよびヒツジで相次いで体細胞クローンの作出例が報告されていることは皆さんもご承知のことだろう。人の年齢にして八十才にもなるウシの細胞からもクローンが生産されている。ゲノムが若返っていることは疑いのない事実である。我が国だけでも一〇〇頭をこえる体細胞クローンウシが既に生産されている。我が国ほど多くの人が体細胞クローン研究を行っている国はない。

一方マウスでは、ハワイ大学の若い日本人研究者により新しい核移植システムが開発され、一九九八年クローンマウスが誕生した。これは顕微受精の技術として開発された圧電子を利用したピエゾマニピュレーターを使用して卵丘細胞の核を未受精卵細胞質内に直接注入する方法であった。もともと、ハワイ大学の柳町教授のグルー

プにより、精子の卵子内注入に開発されたものである。私たちも、独自に開発した連続核移植法により、体細胞からのクローン作出に成功している。クローンは、理論的には人を含めた全ての哺乳動物で可能であると考えて良いだろう。

クローンの意義

クローンは我々人類にとって、福音となるのであろうか。間違いなく言えることは、個体作出技術は新たな動物生産の手段として多方面へ応用されるということである。つい最近、クローンウシの肉の販売を巡って、少々滑稽な問答がなされていた。美味しい肉の安定的生産……？個人的な考えだが、クローン技術を食肉生産と結びつけてばかりいると、この技術の真価を見誤ると思う。むしろ、人との関連が将来の焦点になるうことは間違いないはずである。人への応用について触れる前に、基礎研究への応用について述べよう。

移植技術を人疾患モデルとなる遺伝子操作マウスなどの実験動物の新たな作出法として応用できれば、その価値は大きい。遺伝子操作の手法が進歩し、最近では特定の遺伝子を破壊してその機能を調べる方法が良く行われる。いわゆる遺伝子ターゲットングである。この操作では、遺伝子をターゲットングした胚性幹細胞(ES細胞、様々な細胞に分化でき無限増殖をする細胞)を、ホストの受精卵と組み合わせて生殖系列キメラを作出し、

次世代でノックアウトマウスを作り出す。しかし、いくつかの欠点をかかえている。たとえば、(1)ES細胞の生殖系列への多分化能力は、培養状態や遺伝子操作過程で大きく影響を受ける。(2)目的の遺伝子をホモに持つ個体を得るためには、少なくとも二世代以上の交配を経なければならぬ。(3)特定の系統のES細胞のみが使用可能である。(4)近交系へのバッククロスには多大な時間と労力を要する。要は、手間暇がかかるばかりでなく、全ての遺伝子で上手くいくわけではないのである。

これに対し、核移植により遺伝子操作した細胞、特に目的の遺伝子をホモに持つように操作された細胞をドナーとして直接個体を得ることができれば、生殖系列キメラ形成を介さずに、遺伝子ターゲットングマウスを得ることが可能となる。しかも同一細胞株から作出されたクローンマウスは、操作領域の遺伝子のみならず、既に全く同一の遺伝的バックグラウンドを持っていることになる。またES細胞の株化が困難な系統においても、目的に応じた系統に由来する細胞を用いることで遺伝的バックグラウンドを選択でき、ホモ化やバッククロスの交配に要する人的および時間的削減が可能となる。最近、核移植によりES細胞からの産子が作出されたとの報告も出された。遺伝子操作クローンマウスの効率的な大量作出における意義は大きい。また、個体での繁殖や維持の難しい系統や繁殖能力に障害のあるミュータントマウスなどの系統においては、有効な個体作出手段となりうる。

さて、人に対しては、一体どのような応用が期待されているのであろうか。ここでは最も重要な一例を挙げよう。それは、細胞レベルでの遺伝子治療(Gene based gene therapy)である。遺伝子上の変異により生じる遺伝病は、一旦遺伝的変異を持てば、必ず子孫に受け継がれて行く。劣性であれば、劣性の男女の間で生まれる子供の二五%がホモとなり、確実に発病することになる。優性であれば、もちろん即座に発病となる。種々のガン、成人病、精神病、老人病などを中心に先天性の異常疾患は、少なくとも三〇〇―四〇〇あり、多くは単一遺伝子の変異であるといわれている。

現在行われている先天性に対する一般的な治療法は、対処療法である。変異により欠乏している遺伝子産物を外的に投与して補う、病気の進行を抑える、あるいは、アンチセンス遺伝子により害となる遺伝子の発現を中和するなどあげられる。しかし、これらは根本的な治療ではない。放置すれば、変異を持ってしまった人(キャリアー)の数は確実に増加する。上述した、遺伝子ターゲットングの技術とクローンの技術を組み合わせた応用について考えてみよう。まず、キャリアーと健常者に由来する受精卵を回収し、その胚から胚性幹細胞を樹立する。ついで、遺伝子ターゲットングの手法により変異のある遺伝子を正常な遺伝子の断片と組み換える。そして、その細胞からクローン技術により子供を誕生させれば、遺伝病の原因となっていた遺伝子の変異は完全に

取り除かれるのである。人のES細胞の樹立にも既に成功している。世界中で細胞レベルでの遺伝子治療研究が進められているが、ヒト細胞を用いた核移植は、現在禁止されている。

最後になってしまったが、畜産領域における有望な利用について一例を挙げる。それは動物工場である。私たちは、生理活性を持つタンパク質を治療薬として多用している。それらの多くは、細胞工学敵手法により目的の遺伝子を組み込んだ培養細胞に生産させるか、あるいは組織などから精製するかのいずれかである。そこで、培養細胞に目的のタンパク質を生産する遺伝子を導入し、その細胞からクローン技術により雌の個体を作成する。遺伝子は、乳腺で特異的に働くような構造としておく。そうすると、成長したクローン個体が生産するミルクの中には、人の治療に使用できる生理活性物質が多量に分泌されてくる。ウシ、ヒツジあるいはヤギを対象に、研究が進展している。クローン技術の利用により数倍効率的に遺伝子導入家畜が生産できるという。

紹介したクローン技術の応用は、近い将来大きなマーケットとなりうる可能性があり、特許の争奪戦が繰り広げられている。核移植によるクローン個体作出技術の利用のためには、産子作出効率の安定化、マウスの系統および細胞種に影響を受けない核移植法の検討が必要であり、残された問題も山積されている。ヒト分野への応用／導入にあたっては、これまでに殆ど検討されていない

胎子の奇形化などの妊娠時における異常の原因究明、得られた産子の正常性などの慎重な検討が必須であろう。

おわりに

21世紀は生命革命の時代といわれる。18世紀後半からの産業革命に端を発して始まったエネルギー革命により、蒸気、石炭、石油の利用が図られ、そして20世紀後半には原子力の利用が可能となった。さらに、最近のコンピュータの飛躍的発展は情報革命をもたらしている。そして、まもなくヒトの生命を支える遺伝子情報の全てがつまびらかになる時代がやってくるのである。私たちは生命革命の時代をどのように受け止めて生きて行くのであろうか。21世紀を生きる人々に突きつけられた大きな命題といえる。

畜友会諸君！

家畜生理学研究室
助教授 半澤 恵

畜友会役員の諸君との付き合いがより深まったのは3年前主事になったことがきっかけだった。3年前と云うと、畜産学科が新農学部の一角を担って厚木キャンパスに移転することが決定してほぼ1年を経過し、厚木キャンパスに新入生を受け入れる前年に当たる。

ところで、この厚木キャンパス移転が話題になり、さらに昨年、一昨年と新入生が厚木キャンパスに入学するようになった時期と、畜産学科統一本部の収穫祭での活躍が目立ち始めた時期とが一致しているのは偶然ではないと思っている。この数年と云うもの、世田谷キャンパスの諸君は満足なかたちで収穫祭に参加できるのも今年が最後になるかも知れないと云う危機感を、また厚木キャンパスの諸君は整備途上の新キャンパスでの満たされない渴望を、それぞれエネルギーに転換し、目の色を変えて頑張った。恒例のことではあるが、特に収穫祭直前の1ヶ月余り、4号館共通実験室で文字通り寝食を共にして努力したことは、諸君に得難い経験となっただろう。

そんな中、僕は、昨年はイベントグループの学生との話し合い等も含め、4号館共通実験室にほぼ毎日顔を出した。だが、今年はずっとほとんど顔を出さなかった。昨年の1年生のパワーと上級生のリード振りを見て、今年は大丈夫だという確信に似た安心感があったからだ。そしてなにより諸君達が主役なのだから。諸君達は期待以上の目覚ましい活躍を示し、畜産学科学生の底力を見せつけてくれた。改めて云う、おめでとう！そしてありがとう！痛快だったぜ。

畜友会は学科学生全員を会員とする団体である以上、どれほど団結しようとも、排他的であってはいけない。常に開かれた会、様々な個性を受け入れ、その上でこれを束ね、団結と競争が両立する、懐の深い会、求心力のある会でなければならぬ。それが課外活動のあり方の基本でもある。苦勞をしても決して独りよがりでない理想を追い求め、悩み、模索する。若い頃の経験はそれが苦勞であるほど大きな財産になる。自分の力を試すことが真の実力アップに繋がる。

さて、2000年度からいよいよ、畜産学科の学生、教員が厚木キャンパスに一堂に会し、新生畜産学科がスタートする。自分たちの所属するキャンパスに愛着を持つことは大切だと思う。その一方で、気の合った仲間同士が集まりに終わらず、広い視野を持ち、協力しあうこと。オール農大としての視野をもつことも大切だ。収穫祭の開催場所ひとつとってみても、個人個人いろいろな

考え方の違いがあるだろう。多数決で簡単に決められることではない。意見の違いがあるときは、それが集団としてのバランスシートになるように、或いは、問題の本質を腹を割って議論し見直す機会になるように、プラス思考でとらえて欲しい。意見を同じくする者だけがごちんまりとしたグループをつくり、他のグループを批判すること自分たちを正当化するという図式は、極めて本能的な行動であり、第三者にとっては、不愉快な存在としか映らない。畜産学科イベント企画、農学科、各同好会、これらをどう束ね、収穫祭を実行でき、しかも日頃の課外活動でもきちっと動ける組織をつくっていくのか、世田谷農友会との関係はどうするのか、厚木キャンパスの課外活動は今まさに本格的なスタートを切ろうとしている。

畜友会と収穫祭畜産学科統一本部の目覚ましい活躍の先鞭を切り、更に今日までこれを支えてきた卒業生に敬意を評し、卒業を心からお祝いすると共に、畜友会の新天地での益々の発展を祈念して筆を置く。
2000年1月1日

集う学友

学校まで片道2時間

畜産学科3年 黒澤 亮

一日二十四時間あるうちの四時間程を私は、通学に費やしている。もっと長い人もいるだろうけど、短いほうではないだろう。一日があと四時間もあつたらどんなにかいいだろう。私は、学校に着くまでに三つの路線を乗り継ぐ、小田急線、地下鉄、JR、その一つ一つは違った客層を持っている。朝、ウチの最寄駅から私が乗り込む電車は、早朝にもかかわらず満員状態である。乗客のほとんどは、サラリーマンでその中に混ざれて私のような学生が何人か見られる。そこから二時間ほど私は、満員の電車でゆられていく。乗り換えは、まさに闘いで皆、必死である。乗口が修羅場になっている時に、中を見るのとけっこうゆったりしていることがある。少し考えてくられてもいいのになあ。客層は、乗り換えの度に若齢化していき小田急線では、自分より若い学生が目立ってきて、車内もゆったりしてくる。帰りは、座って行けることが多い。しかし、JR線は朝のサラリーマンの人たち

は、朝とは様子が違う。その手にビールやチューハイを握って小指につまみの入った袋を引っかけて、つり革につかまって一杯やっている人。酔っぱらって何かをつぶやいている人。うとうとしながら駅に着く度に、はっとしてどこの駅なのかを、必死に確認する人。寝っぴいで酔っぱらいにたたかれて、何が起こったのだろうかと不思議そうにあたりを見渡す人。大切そうにゴルフクラブを抱いて、うれしそうに寝っている人。様々な人がいる。こんな愛らしいオッチャンたちも、家に帰れば一家の大黒柱であるに違いない。自分の父親もこのように職場と家を往復しているのかと、目の前のオッチャンと父親を重ねて見るときは、ちょっと複雑な気持ちになる。でもこのような光景を見ると、家が近づいていることも手伝ってか、ホッとするのも確かである。

一年の頃は、CD一枚聞き終わるまでに着けない距離は通っちゃいけないでしょう、と思っていたが、年月を重ねるうちに苦にならなくなってきた。今いる自分は、この遠距離通学によって鍛えられ成長したおかげで、在

カナダでの夏休み

畜産学科2年 相澤 妙子

99年の夏、私はカナダブリテッシュコロンビア大学短期留学プログラムに参加し、カナダのバンクーバーに1カ月間滞在した。バンクーバーは整然とビルが立ち並び一方で、海や森といった豊かな自然も残されていてとても過ごしやすい環境だった。

始めの頃は大学の寮から、中頃はカナダの一般家庭にホームステイし平日は英語の授業に通った。先生は親戚の人の人で、英語に不慣れな私達のために日常英会話からカナダの農業についてまで優しく教えてくれた。

また、アシスタントとしてUBCの学生が2人いて、休日や放課後には一緒に中華街に行ったり、サイクリングをした。フェリーに乗ってUBCの農場にも行き、昼は搾乳の見学、夜は海辺で星を眺めながらキャンプファイヤーを楽しんだ。その他、英国風の街並のビクトリアにも遊びに行くなどしてとても楽しい時間を過ごした。

しかしこのような観光ばかりではなく、カナダに暮らすOBの方々が経営する農園で作物の説明を受けたり、今の農業の問題点や将来の農業のあり方について話を聞

き勉強も、もちろんした。プログラムの終わり頃にはUBCの学生73名と農大生15名で、4泊5日のフィールドトリップに出かけた。カナダの主要な農業地域を回る旅で広大な牧草地から始まり、七面鳥・牛・バツファローの牧場見学をしたり、桃・りんご・ラズベリー等の果樹園で試食をしつつ説明を受けた。チーズ工場やワインナリー等の食品加工施設も巡り、おいしい旅だった。

この度の間にUBCの学生達と食事を共にしたりサッカーやバレーボールをして遊び、仲良くなれたのがすごくうれしかった。カナダは多民族国家だけに出身国もいろいろで、英語を共通の言葉として使って話すという体験ができておもしろかった。中国人の友達に中国語を教えてもらったり、反対に日本語を教えてあげたりもした。私の拙い英語のためにお互い勘違いしてしまっただこともよくあったけれど。

大きな期待を持って日本を出発し、実際にカナダで過ごしてみると期待していた以上の貴重な体験ができ、出会った多くの人達への感謝の気持ちで一杯になる。ホストファミリーの笑顔もカナダの友達やさしさも絶対に忘れない。この一カ月の思い出は私の宝物だ。



収穫祭の感想

畜産学科2年 黒澤 望

僕は、今年(1999年)の収穫祭には、去年と同様に文展1つと模擬店2つで参加しました。その内の模擬店1つと文展は厚木キャンパス有志として残りの1つは世田谷キャンパスの方のサークルの会員の一人としてでした。厚木キャンパス有志というのは、厚木キャンパスには収穫祭は行われていません、しかし、世田谷キャンパスの収穫祭の文展、模擬店には、出店できるので厚木キャンパスの人にも収穫祭を楽しんでもらいたい、厚木キャンパスとして出店することでお世田谷キャンパスの人や収穫祭を見に来た他の人たちにも厚木や厚木キャンパスのことを知ってもらいたくて有志を募った集まりです。

去年の模擬店はやきとりで出店してよく売れたのですが、今年は厚木色を強く出そうということで厚木名産の豚漬(豚ロースを味噌で漬けた物)を小さく切って焼いた物をタコの代わりにタコ焼きの生地の中に入れて焼く、その名も「ぶたっこ焼き」なるものを発明し販売しました。そしたらこれが思いのほか当たってしまい、3日目

には完売するという結果で、良い方で僕の予想を裏切ってくれました。赤字にならなくて本当によかったです。

文展の方は、農畜合同で厚木と厚木キャンパスの紹介をしました。なんとこれもこの目玉は「厚木ウォーカー」と「たまちゃん」です。この「厚木ウォーカー」は、厚木キャンパスの人たちにアンケートをとったりして、好きな食べ物屋さんやよく買い物に行く所、はたま厚木キャンパスや富士農場のことを学生から見た感じそのままに本にしたものです。これも驚くほど好評で2日目で殆どなくなっていました。それに畜産学科を受験したいと言う受験生と話して自分も2年前はこんな感じだったとかなあと、むかしを思いおこしていました。ちなみに「たまちゃん」は文展のマスコットキャラクターです。

今回の収穫祭は、いろんな人たちに感謝(お詫びも含む)したい思います。2年連続してこの壮大なプロジェクト(笑)サポートをしてくれた祐森先生、株主になっただけの厚木キャンパスの畜産学科のみならず、快く「厚木ウォーカー」の取材に応じてくれたお店の人や先生、富士農場の方々、そして文展や模擬店に関わってくれた人達、本当に、ありがとうございます。

おいらと應援團

畜産学科2年 齋 藤 常 浩

四月八日入学式。(とうとう俺も農大に入学してしまつた)数多くの先生の挨拶が始まる。(同じ様な事しか言わないんだから早く終わらないかな)式も終盤。学歌。凄い勢いで登場した学生服を着た人達による学歌が始まる。(おお凄い迫力。お疲れ様だね)正直言つて入学当時は応援団ましてや「大根踊り」の存在すら知らなかった。式終了後、統一本部の説明を受ける。(お、俺に合ってるかも。入ってみようかな)明日詳しい話を聞く事にし、家路につく。

四月九日、本部の部屋へ行こうと思ひ、生協の吹き抜けを通る。すると前方から応援団の人が来た。「君、今暇?」「これから本部の部屋に行くところですけど」「場所わかる?」「生協の五階にあるって聞いてましたけど」「今暇だから案内してあげるよ」「じゃお願いします」ところが案内された所は二階。入口には「東京農業大学全學應援團」の文字の看板が。(何?話が違ふじゃないか!)部屋に通され、ジュース、お菓子が差し出された。学生服の先輩が四、五人、一年生らしき輩が七、八人。(皆

勧誘されてるよ)「君は煙草吸うの?」「ええ、吸いますけど」「じゃ遠慮せずに吸いなよ」先輩に火を付けてもらう。何とも変な感じだ。営業文句であるう應援團についての説明と勧誘が始まった。「二十分位で済むからちょっと聞いてて」説明はされたが当然の事ながら頭には入っていない。俺は應援團に入るつもりはない。説明が終わった頃隣に座っていた一年が話しかけてきた。「君、入団するの?」「俺は入るつもりはないけど」「世間話が始まる。何故かそいつと意気投合し、一緒に帰る事になった。(本部には後で行けばいいや)帰ろうとしたら先輩が「俺らもこれから帰るけどカラオケ行かない?それとも酒がいいかな?」「カラオケと酒が好きかな俺とそいつが拒む訳がない。「お言葉に甘えて」カラオケルームに入った途端、先輩達は豹変した。学生服を脱ぎ捨て、ドスのきいた声でガッチャマン、アラレちゃんを唄っている。二人共アニメ好きらしい。更に酒も入り雰囲気も高まる。歌を唄い酒を喰らい、そして先輩達のプライベートな事も含めて應援團の話聞く。(應援團って何か面白そうだな。金もかからないし、暴力も無い。厚木からの交通費も出るし、バイトもできるらしい。友人も沢山できるのか。いいねえ)應援團にするか統一本部にするか考えながら家路につく。

四月十日、団室に行ってみると、日テレのスタッフが撮影している。(さすが日本一の應援團。テレビも来てるじゃん)突然カメラとマイクを向けられ「君は應援團

に入るのかな?」「はい、入団します」(あ、思わず言つてしまった。)続いて入団届けに記入。「これで君も應援団員だね。やっていけそう?」「え、あ、頑張ってみます」周りの先輩達からの祝福の拍手が湧いた……。

これが俺と應援團との始まりであり、全て実話である。

一年を振り返って

畜産学科1年 新 保 麗 子

大学に入学してもう一年がすぎようとしています。初めての一人暮らし、初めての講義、初めての収穫祭。初めてづくしの一年間で、本当にあつという間に過ぎていってしまったような気がします。あまりにも早過ぎて何をしたのかもあまり憶えていません。

そんな一年の中でも鮮明に憶えているのは、収穫祭でした。今年も農学部が世田谷で収穫祭が行える最後の年という事もあり、先輩のヤル気は十分。私達一年生もいやがおうにも盛り上がっていました。準備は9月中旬から始まって、収穫祭当日の10月31日までの約2ヶ月間続き、その間厚木キャンパスに通っていた一年生と二年生は授業がおわってから毎日のように世田谷に通うというハードな生活をしていました。でもそこは若さ。終電始発で帰る日々も決して楽という訳ではないのですが、感性に近づいていくみこしや北門、体育祭の舞い、やぐら、特別企画を見る度に、「まだまだやれる!」「もっとがんばらない」と思えて、2ヶ月間がんばれたと思います。そして、しだいにそんなハードな生活も楽しくなってい

平成11年度畜友会事業計画 (一部中間報告)

畜友会だより

平成11年

- 6月上旬 第28回学内スポーツ大会参加
6月24日 平成11年度畜友会定期総会
7月9日 第28回学内スポーツ大会慰労会 (於4号館)
7月28日 1年生を対象とした収穫祭説明会 (於富士畜産農場)
10月13日 東京農業大学農友会
第108回収穫祭畜産学科統一本部本部開き
(於レストラン・すずしろ)
10月31日～ 第108回収穫祭参加
11月4日
11月24日 東京農業大学農友会
第108回収穫祭畜産学科統一本部慰労会
(於レストラン・すずしろ)

平成12年

- 3月20日 畜友会誌「ふじみの第36号」発刊
卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
4月上旬 新入生学外オリエンテーション参加
5月上旬 新入生歓迎会
5月下旬 平成12年度畜友会定期総会
※他にも、平成12年度に行われる厚木キャンパスでの学生主催のイベントに協賛していく予定です。

きました。
この2ヶ月間、先輩達と一緒に作業をしていて、本当にいろいろな事を教えてもらいました。1つの事をやりとげる大変さ、自分の意志をつらぬく難しさ、そして先輩のすごさ。今まで誰も教えてくれなかった事を言葉、行動で教えてくれました。2ヶ月間という長かった収穫祭、準備もファイヤーストームで全部燃えてしまったけれど、次の第109回収穫祭の意気込みは今から十分蓄えてあります。世田谷ではもう収穫祭はできなくなってしまうけれど、今度は厚キャンで新しい収穫祭をつくりあげていきたいと思っています。

東京農業大学畜友会 特別会計収支報告

(平成10年6月1日～平成11年5月31日)

第107回収穫祭			
収入の部	予算	支出	差引残高
一般会計より	760,000	760,000	0
支出の部			
統一本部	350,000	295,800	54,200
前夜祭・特別企画	50,000	29,986	20,014
体育祭	50,000	49,781	219
宣伝隊	150,000	146,651	3,349
北門装飾	10,000	0	10,000
家畜苑	150,000	138,378	11,622
次年度繰越金		99,404	99,404
計	760,000	760,000	0
スポーツ大会			
収入の部	予算	支出	差引残高
一般会計より	300,000	34,610	265,390
支出の部			
第28回スポーツ大会慰労会費	200,000	34,610	165,390
第28回スポーツ大会団結式費	100,000	0	100,000
計	300,000	34,610	265,390

上記相違ないことを認めます。

東京農業大学農友会創立107回収穫祭
畜産学科統一本部会計
平成10年度畜友会会計監査

古川 徳 ㊟ 松岡 昭善 ㊟

田端 将人 ㊟ 池田 貴司 ㊟

平成10年度畜友会決算報告

(平成10年6月1日～平成11年5月31日)

収入の部	予算	決算	差引残高
前年度繰越金	1,477,688	1,477,688	0
(会費収入)			
新 入 生	2,000,000	472,500	△1,527,500
編 入 生	90,000	18,000	△ 72,000
未 納 会 員	1,636,000	192,000	△1,444,000
雑 収 入	1,500	3,606	2,106
計	5,205,188	2,163,794	△3,041,394
支出の部			
支出の部	予算	決算	差引残高
スポーツ大会援助費	300,000	34,610	265,390
収穫祭援助費	760,000	760,000	0
ふじみの刊行費	400,000	313,710	86,290
卒業生祝賀会費	200,000	200,000	0
卒業生記念品費	500,000	500,000	0
新入生歓迎会費	250,000	165,029	84,971
消 耗 品 費	100,000	33,314	66,686
交 通 費	180,000	94,020	85,980
雑 費	100,000	19,365	80,635
予 備 費	160,000	0	160,000
次年度繰越金	2,255,188	43,746	2,211,442
計	5,205,188	2,163,794	3,041,394

特別会計予算（案）

（平成11年6月1日～平成12年5月31日）

第108回収穫祭			
収入の部	予算	支出	差引残高
一般会計より	760,000	670,000	△90,000
前年度繰越金	-	99,404	99,404
計	760,000	769,404	9,404
支出の部			
支出の部	予算	支出	差引残高
統一本部	350,000	350,000	0
前夜祭・特別企画	50,000	50,000	0
体育祭	50,000	50,000	0
宣伝隊	150,000	150,000	0
北門装飾	10,000	10,000	0
家畜苑	150,000	150,000	0
予備費		9,404	9,404
計	760,000	769,404	9,404
スポーツ大会			
収入の部	予算	支出	差引残高
一般会計より	300,000	200,000	△100,000
支出の部			
支出の部	予算	支出	差引残高
第28回スポーツ大会慰労会費	200,000	-	△200,000
第28回スポーツ大会団結式費	100,000	-	△100,000
スポーツ大会参加費	-	200,000	200,000
計	300,000	200,000	△100,000

平成11年度畜友会予算（案）

（平成11年6月1日～平成12年5月31日）

収入の部			
収入の部	予算	決算	差引残高
前年度繰越金 （会費収入）	1,477,688	43,746	△1,433,942
新入生	2,000,000	2,170,000	170,000
編入生	90,000	80,000	△10,000
未納会員	1,636,000	986,000	△650,000
雑収入	1,500	0	△1,500
計	5,205,188	3,279,746	△1,925,442
支出の部			
支出の部	予算	決算	差引残高
スポーツ大会援助費	300,000	200,000	△100,000
収穫祭援助費	760,000	670,000	△90,000
ふじみの刊行費	400,000	400,000	0
卒業生祝賀会費	200,000	200,000	
卒業生記念品費	500,000	400,000	△100,000
新入生歓迎会費	250,000	250,000	0
消耗品費	100,000	100,000	0
交通費	180,000	200,000	20,000
雑費	100,000	200,000	100,000
予備費	160,000	100,000	△60,000
通信運搬費	-	100,000	100,000
イベント協賛費	-	160,000	160,000
次年度繰越金	2,255,188	299,746	△1,955,442
計	5,205,188	3,279,746	△1,925,442

平成11年度畜友会役員

平成11年6月1日～平成12年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	天野卓	育種
副会長	栗原良	飼養
	門司恭	繁殖

執行委員

役職	氏名	学年	研究室
委員長	佐々木大	3	飼養
副委員長	得能樹健	32	飼養
書記	池田貴司	32	利用
会計	勝又瑞穂	32	繁殖
渉外	平野良和	32	利用
企画	高田直樹	32	飼養
庶務	原伊藤琢磨	32	利用
編集	山口こざえ	32	繁殖
監事	古川昭徳	先生	利用
	岡岡昭留	先生	繁殖
	岩本昭恵	先生	繁殖
	合田伯恵	先生	繁殖

ブレーション

桑祐野半渡菅	山森村澤邊田	岳誠こ忠	人司う恵男隆	先生先生先生先生	繁殖育生衛	殖養種理生
--------	--------	------	--------	----------	-------	-------

東京農業大学農学部畜産学科 “畜友会”会則

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。
- 第二条 本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章 業務

- 第四条 本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。
- (1) 会員相互の親睦
- (2) 講習会、研修会及び研究会発表の開催
- (3) 機関紙「ふじみの」の発行
- (4) 大学行事（収穫祭等）への参加
- (5) その他第三条に付帯する業務

第三章 会員及び役員

- 第五条 本会の会員は次の通りとする。

第六条

- 本会は次の役員を置く。
- (1) 正会員 畜産学科の学生
- (2) 特別会員 畜産学科教職員並びに大学院生
- (3) 名誉会員 役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第七条

- (1) 会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
- (2) 委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の

時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八 条(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。
役員および連絡委員の選出および任期

第九 条

(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)新執行委員会は、現執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、他の1名を2年次生より選出するものとする。
尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学科「1、2年次」および各研究室「3、4年次」で協議のうえ選出

する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十 条(1)総会は定期総会と臨時総会とする。

(2)総会は正会員および特別会員をもって構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4)臨時総会は会長が必要と認められた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一 条 総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二 条(1)総会は正会員および特別会員の4分の一以上の出席により成立する。

(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員数の五分の一を上限とする。

(3)委任状の検査は執行委員が行う。
定期総会は次の事項を決議する。

第十四 条 総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五 条

議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六 条

総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七 条

総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第十八 条

総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十九 条(1)第六條(3)の執行委員は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することができる。

執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2

第二十 条

以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が務め、出席者の過半数により可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十一 条

執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十二 条

連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要と認められた場合に開催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。

①執行委員会で決定した事項の伝達。
②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席する事ができる。

第二十三 条

本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章 会計

第二十四条

本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以てこれにあてる。但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条

(1) 会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取消しの場合はその限りではない。

(2) 会費は会長および委員長連名で毎年3月に

第二十六条

入学対象者に対して請求するものとする。本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならぬ。

第七章 機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条(1) 第4条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2) 編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3) 編集委員会の責任者は編集委員の内1名が担当する。

(4) 編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任をもって執行する。

第八章 大学行事への参加

第二十八条(1) 第4条(5)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2) 設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。

尚、内規は別に定める。

(3) 委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章 監査

第二十九条

監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条

監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認められた場合は随時監査することができる。

第十章 付則

第三十一条

本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条

本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを施行する。

各部門委員長より

学校って？

統一本部委員長

三年 佐々木

大

「やめたい！」こんな気持ちで入学した。考えてみると、この三年間、一回も学校へ行きたいと思っただけでなかった。勉強する気がない訳ではない。どちらかというと勉強は好きな方だ。講義に出ても、これは学びたいと思うが、楽しくない。高校の時は、1つ1つの授業が楽しくて、限られた時間の中で一生懸命勉強していた。両親にこのことを打ち開けた。

「もう少し頑張ってみろ。」

これが答えだった。

「仕方がない、学校に行くか。」

と、思いながら通った。

「収穫祭、やってみないか、楽しいよ。」

と突然言われた。練習生の先輩だった。どうせやることでもないし一年生の時ぐらいやってみようか。気楽な気持ちで畜産学科統一本部に入った。十月の一ヶ月間、バイト返上で、毎日、夜中の一時、二時まで当然の様に、収

穫祭に向け仕事をした。はっきり言ってつらかった。でも、この準備をすることが楽しかった。収穫祭本番が来ると、それはもう、言葉が出ないくらい感激した。この年になって、涙を流すとは思わなかった。

「大学って、楽しいよなー！」こんな気持ちになった。

「オレ、収穫祭やりたいから、大学に行かせてくれ！」

両親に言った。

三年の収穫祭、オレは統一委員長となった。仲間をどうまとめればいいのか、それだけを、いつも考えていた。しかし、いつもバラバラだった。いつも一人だけで居るような気がした。

でも、準備期間に入ると、そこには仲間がいた。しかも、日がたつにつれ、その人数は多くなっていった。五十人以上もの人間の上に立つようになっていた。こんなに楽しい収穫祭、味わってない人は可愛そうだと思った。

一〇八回収穫祭は、賞をとる部門は、総ナメにしたと言っているほどに頑張った。家畜苑、北門装飾も、他学科の学生に絶賛されるほど、良い出来だった。これも、仲間の頑張り、オレの力なんて微々たるものだった。でもこれで、自分の役目も終わってしまった。

このまま、もし卒業して、周囲の人に大学で何を学んで来たと言われたら、

「仲間の大切さ」

と答えるだろう。教養は全々ない。でも、仲間ってものを知ることが出来るのは大学しかないと思っている。

傾ヨリのススメ

前夜祭・特別企画委員長
二年 鈴木 木明子

一年生のオリエンテーションに引率として富士に行った時、一年生に何かとサークル活動とか学校生活について質問された時、何の気なしにかこう言っちゃったと思う。「あたし、すごく傾ってる人間だから参考にならないよ。」って。正解!! と思う。一年間全て、私の場合収穫祭中心で回ってる。畜産学科統一本部、前夜祭、特別企画のステージネタをたえず作ったり、コント・舞台を見ては台詞まわしが気になるし。ネタを多くするため、ラブマシーンもブッチモニもMAXも踊れるようにして……。たぶん、アタシは魔物に取りつかれてるんだと思う。魅力という名の魔物に。甲子園には魔物が住んでいて、良く聞くけど、ステージ(特設野外ステージ)にも住んでるんじゃないかな。ううん、ぜえ↓たい居る!! だから、出来るだけ多くの人に、奴の住むステージのってもらいたかった。男子は体育祭の「舞」にみんな出るが、女子にはステージにあがってもらいたかった。何ていうか、そうして実際、跳んだり、踊ったり、そして演じたりして、そのステージに登ってくれば私達が、意味ない無駄な会議といわれながらも4月から毎週、そして10

月からは毎日通って頑張ってたつもの、どんなものかを理解してもらえないんじゃないかって思うし、何よりもみんなにあの楽しさを十分に味わえる機会をつくってあげたかった。みんな、どうだった? 私は自分で大満足してます。半端強制状態で一年生に頼んで踊ってもらったのに、途中からは自分たちから練習してくれたり、そして鼻歌にまでも曲が登場して……。ある子に「アキさん、すごく楽しかった。もし機会があったら来年もやらせて下さい」と言われた時、すごく私はうれしかった。そして、やっぱり奴はステージにも住んでいてって確信した。

奴は、ステージに立とうとする人の心を読んですぐにその雰囲気を作ってしまう。もし、ヤル気がないと客の反応の乏しい寂しいものを、もし、完全燃焼したいという気持ちでぶつかると、何と、ステージが我々を受け入れてくれて、客までも味方につけておいてくれる。そんなライブ感がたまらない。心の奥底から震いたつ。私は奴に会いたくて会いたくてしかたないんだ。どんなモノが作れるか、とか作ろうとしてるかなんて具体的に言えないし、奴が今度私にどういう態度で迫ってくるかなんて分からない。……けど、私は絶対に奴に勝つ自信があるんだ。だって、アタシには仲間がいるから……。

宣伝隊を初めて経験して

宣伝隊隊長
二年 三谷 直子

今年の収穫祭は、宣伝隊という、15学科から数人ずつ集まり、都内各地に行き収穫祭の宣伝活動をする仕事をしました。普段、厚木校舎では2学科しかいないので、他の学科にたくさんの方々ができて、とても楽しかったです。

宣伝活動では、小田急線沿いの駅で野菜配布や農大名物大根躍りをして、農大の収穫祭を地元の方にアピールしました。10月23日に行われた経堂パレードでは、戦後初となる、研究室で飼われている動物(ヤギ・ブタ・犬)を連れたの宣伝活動をしました。戦前の収穫祭では馬などを連れてパレードをしたそうです。一〇八回という収穫祭の歴史を改めて実感し、また、畜産学科の世田谷校舎最後の収穫祭のいい記念になったと思います。

今、収穫祭を振り返ってみると、あんな充実した生活めったにないなあとしみじみ感じます。忙しすぎてフラフラになって、目の下に大きなクマつくって、もうそれを隠す気力もなくなって、どっかに意識飛んでることもあったけど、それもいい思い出です。来年もみんな楽しんでやっていきましょ!



第108回収穫祭特別企画表彰式

神輿

神輿隊長
三年 得能 樹之

押忍、本年度畜産学科統一本部神輿隊長を務めさせて
頂きました得能樹之です。

えー今年は何と三年連続『経堂パレード』における
『農大通り賞』を受賞という快挙を為し遂げる事が出来
ました。あの日の皆の気合があれば当然かな？

まあここまで来るのに多くの問題と戦ってきたのを実
感しましたね。一つは自分自身との戦い、二つめは時間
との戦い、そして仲間との戦い。だけどこの戦いがあつ
たからこそ今回の神輿が出来たんだろうと思う。

一番こたえたのが自分との戦い。これは本当につらかつ
た。立場以上の人間になって先頭をきっていかなければ
ならないし、先輩方のプレッシャーもあるし、アイデア
を出すのにも一苦労。けど支えてくれる人も居たからな
んとかふんばってこれた。

一番充実したのが仲間との戦い。互いの意見をぶつけ
合って言い合いをしたり。それぞれを認め合ったりでた
のしかった。一生懸命に頑張ったなあと思える時間だっ
た。

一番世話をかけたのが「宣伝隊長三谷直子」さん、い
い加減で我がままな自分を支えてくれて本当にお世話に
なりっぱなしでした。他にも作業を手伝ってくれた人、
アイデアを提供してくれた人、皆に世話になりっぱなし
で感謝してもらえない位うれしかった。
自分の学生生活の中で他人に自慢できる日々を過ごせ
た事が何事にも変え難い喜びである事を実感するばかり
だった。
これで一つ大人に近づいたかな？



平成11年度
経堂みこしパレード

← 神輿完成

「かかってこいや！」



thanks
畜産学科
諸先生方
畜友会
メンバーの皆様
special thanks
佐々木 大磨
原 琢直
三谷 直子

体育祭を終えて

体育祭委員長
三年 池田 貴司

1年の時から3年のまで参加してきた体育祭。どの年
をとっても楽しかったが、自分としてはやはり記憶に新
しい第一〇八回収穫祭・体育祭だろう。事もあろうに自
分が応援団長として参加したということが理由の1つで
ある。会議もロクに出席せず、ワガママばかり言ってい
たのを覚えています。若かったなあ、あの頃は。

9月に入り、残暑の厳しい中で神輿作成が行われてい
る時、その傍で少しずつ始まった体育祭。毎日のように
来てくれた1年生に少しずつ舞を教え、早い人はその場
ですぐに出来ていたものの、1番目の舞に1〜2週間を
要した人が若干2人。心から焦りを感じたあの日、忘れ
ません。

10月。4号館で本格的に練習開始。人数と舞の全体の
構成が難しく、全体練習がごとく雨に降られてしま
い、結局きちんとした全体練習は1回しかできないまま
本番に挑むことになった。

11月4日、いよいよ体育祭当日。朝からサラシを巻き
心身共に気合が入っていく。不思議とサラシを巻くとみ
んなイイ顔になり、こっちまで気合が入ってくる。順調

にプログラムが進んでいく中、畜産学科は様々な競技で
他学部を圧倒していた。特に凄かったのが棒引き(女子
のみ)だろう。他学科5人に対し畜産は2人。掛け声一
つで数メートル引っぱるあのパワーは畜産ならではと言
えよう。そしていよいよ応援合戦が幕を開ける。
みんな緊張に押しつぶされそうな顔をしてはいるが、
朝、サラシを巻いた時以上に気合が入っているようのみ
んなイイ表情だ。櫓の裏で円陣を組んで改めてみんなの
気合を感じ、最高の気持ちで本番を迎えることが出来た
と思う。舞の最中のことは緊張であり覚えているとはい
けど、3年間の体育祭で一番満足できました。

第108回収穫祭 体育祭



棒引き (女子)
「やった一勝ったぞ!!」

やぐら
櫓黄金伝説到来

櫓裝飾委員長
二年 合田 恵子

体育祭の櫓って聞いたなら「はっ？！何それ？」って思いますよね。

くわしくご説明いたしましょう。

櫓というのは、グラウンドを取り囲む様に、十五学科がそれぞれ一つずつ建てた舞台の様なもので、収穫祭最終日の体育祭の時に、その上で応援するのです。

で、それに絵を描いて競い合うのですが、

昨年までの十年間、櫓裝飾は造園科学科の独占の場でした。我が畜産はというと、自慢じゃないですが、

第一〇七回収穫祭 二位(テーマは双龍)

第一〇八回収穫祭 一位(テーマはライオン)

造園科学科の連覇に足止めしたのです。

もちろん今年も二連覇をねらいますよ

厚木で収穫祭を開催し、世田谷で体育祭に参加するとう、距離的にも、時間的にも、体力的にも、大変ですが、体育祭の櫓といえば畜産といわれる様に、伝説を作っているというではありませんか！



櫓製作中

北門裝飾を終えて

北門裝飾委員長
三年 勝 又 瑞 穂

三年間収穫祭で北門裝飾に参加して得たもの

- ・ 大きな達成感
- ・ 大好きな先輩
- ・ 大事な友達
- ・ カワイイ後輩
- ・ ちょっとした大工技術
- ・ 少しの寂しさ

収穫祭に参加した人なら「なるほどな」と思ってくれ
ると思います。こんなに多くのものを得ることができた
収穫祭。参加して本当に良かったと思います。前夜祭の
日の夜、完成した北門の前で、北門をやって良かったと
泣いてくれたコがいました。本当にありがとう。すごく
うれしかったです。最終日、ファイヤーストームの燃え
盛る炎を見て、楽しかったこと、イヤだったこと、いろ
いろなことが思い出されて、思わず泣いてしまいました。
一緒に北門を作ってくれた皆、本当にありがとう。そ
してお疲れさま。皆のおかげで素敵な思い出がしまし
た。(コズエ、ケンカしたり、意見がぶつかることもあっ
て大変だったけど、いろいろ助けてくれてありがとう。

本当に助かりました。一緒に北門できて良かったです。
後輩の皆、期待しています。私達をビックリさせるよう
なものを作ってください。がんばってね。



北門前にて 完成記念

家畜苑について

家畜苑委員長
三年原 琢磨

「労働基準法」という言葉はどんな意味なんだろうと
考えさせられる一ヶ月だった。とにかく大変なのである。
家畜苑委員長それはあまりにも重くのしかかる言葉で、
それだけで気の弱い私などは断腸の思いがするのである。
委員長、それはトップのことである。自分が委員長、大
変なことである。

家畜苑とは、どんなものか説明してみたいと思う。一
言でいうならば、動物屋さん。牛、鶏、豚そしてラマと
結構多くの動物が来ることができた。世田谷に動物が来
るということはかなりの評価があるらしく子供たちには
大変人気がある。中でもひよこと水牛は人気でみなさん
よろこんでくれる。また今年にはラマも来て、これも人気
があったようだった。

今年、3年生が世田谷で1・2年生が厚木からとい
うことで数が足りるかわからなく大変になると思われた
が、1・2年生が頑張ってきてくれたおかげでスムーズ
に仕事が運んで良かった。また、今年、女の子を入れ
例年にはないことを行ったのだが、女の子たちが頑張っ
てくれイラストの方で仕事をしてくれたため、とてもき

編集後記

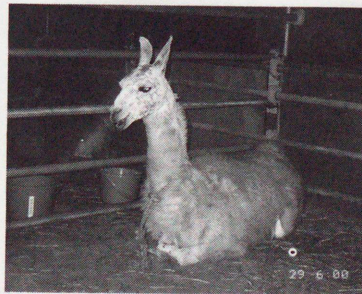
「ふじみの」も今年で第三十六号を発行する事ができ
ました。

平成十年度より厚木キャンパスに学科移転が行れ、世
田谷キャンパスと厚木キャンパスとの連携は大変ではあ
りましたが、お忙しい中、先生方や、先輩方として同輩
や後輩などの協力のもと、畜友会、収穫祭の活動などに
ついて書いてみました。昨年まで学科移転で先輩と後輩
との間には今までにない距離感がありました。しかし、
今年からやっと一年生から四年生まで揃うことができま
した。「ふじみの」第三十六号が今までであった距離を縮
める第一歩となればと考えております。

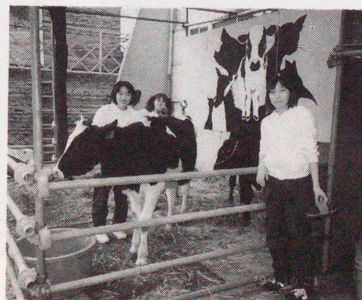
最後になりましたが、この一冊を発行するに当たり原
稿を書いて頂いた先生方、ならびに会員の方々に深く御
礼を申し上げます。

編集委員代表 山口 こずえ

れないバックボードが出来た。男の方も、体育祭の方の
子たちも参加してくれとても感謝している。今年、畜
友会全員で家畜苑を作った感じがするので良かった。来
年がどういう風になるか分からないがこれだけ人気のある
家畜苑をずっと続けていってほしいと思う。
とてもつらい一ヶ月だったけどつらい分だけ出来たと
きの喜びもあった。そして色々なことを勉強することが
出来た。終わってみるとあっという間の一ヶ月だが、一
年の中で最も密度の濃い一ヶ月だと思う。
最後に、近江先生を始めとする先生方そして家畜苑に
携わったすべての人々に感謝したい。どうもありがとう
ございました。



厚木牛のモモ



家畜苑の人気者ラマ

平成12年3月20日 発行

「ふじみの」第36号

編集委員 山口こずえ

飯田 京

発行者 畜友会

東京都世田谷区桜丘1-1-1

発行者 東京農業大学畜友会

電話 (5477)2290

東京都新宿区改代町16

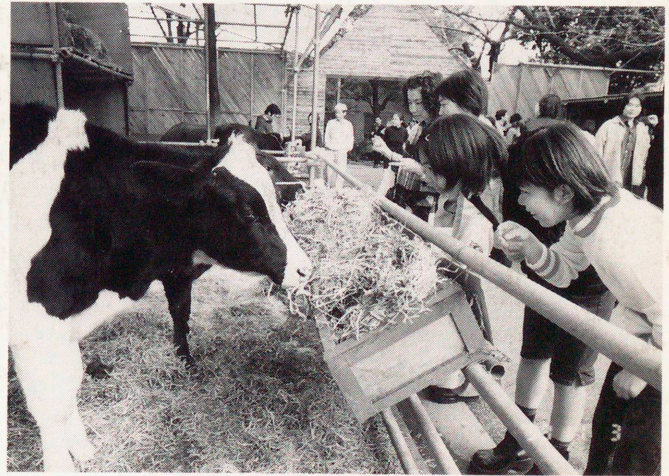
印刷所 (株) マイクロ印刷

電話 (5261)1001

体育祭の舞い「雷獅蹴乱」



平成11年度家畜苑



第108回収穫祭 おつかれ様でした!!

